

ミリンダ・ティーカー訳註 (一)

玉 井 威

はしがき

『ミリンダパンハー』(Milindapañhā)には、長らくその註釈書がないとされてきたが、近年、Milinda-Tīkā (Madhuratthapakāsinīとも呼ばれる)と称せられる註釈書が発見された。それはカンボージャに伝わっていたもので、1961年、ジャイニ氏がそれを校訂出版した (Milinda-Tīkā, ed. by P. S. Jaini, PTS, 1961)。

本書は次の四つの部分からなっている。すなわち、1. Pakiṇṇakatt-havivaraṇaṃ 2. Jātakuddharaṇaṃ 3. Gāthāsarūpaṃ 4. Saṃkhyāsarūpaṃ の四部である。この中で、最初の Pakiṇṇakatt-havivaraṇaṃ の部分だけ (MS. で言えば、全188葉のうち初めの46葉のみ) が、いわゆるミリンダパンハーに対する註釈となっている。この部分で扱う問数は、175問であるが、実際に註釈が施されているのは、そのうち110問だけで、残りの65問については何ら註釈がなされず、ただ Miln. 本文中にはない問名がそこに記されているにすぎない。第二の Jātakuddharaṇaṃ と呼ばれる部分は、Miln. 中に引用されているジャータカの出所を明らかにしている。この部分が最も大部で、188葉中、125葉ほどを占める (但し、ジャイニ校訂本中には、ジャータカ本文は省略されている)。第三の Gāthāsarūpaṃ と称せられる部分は付録の一種であって、Miln. 本文中に引かれている偈をここに再録している。次の第四の Saṃkhyāsarūpaṃ も付録の一種であって、ここでは Miln. 本文中に説かれる教義を法数順

に、二十五種並べられていて、長部中の *Samgītisuttanta* の如き形態をとっている。

本書の著者は、奥付(p. 71)によると、*Mahātipiṭaka-Cūlābhayātthera* となっている。彼についてはほとんど何も知られていないが、「*Laṅka* 島の *Mahāvihāra* で書かれた」(p. 72)という記述よりすれば、著者は大寺派の長老であったとも考えられるが、ジャイニの言うように、スリランカの諸年代記にもマニユスクリプトのカタログにも、全くこの作品への言及がないことからすれば、著者がスリランカ人ではなかったという推測も成り立つ。ジャイニ氏はまた、本文中に (p. 3) に *Biṅgaratṭha* (現代タイのチェンマイ) への言及があることや、ここに 十四・五世紀の頃、*Sinhalese Saṅgha* があったというよく知られた事実とを併せ考えると、著者はこの *Saṅgha* に属し、自分の仕事に威信を付す目的で *Lankā* の *Mahāvihāra* に言及したのかも知れないと推測している (Intro. p. xiii)。この書の成立年代は、前述の著者の問題とも関連するが、ジャイニ氏は種々に検討した結果、ビルマ・タイで広く行なわれた *Cullasaka* 王紀元の 835 年すなわち西暦 1474 年を得ている。

本書は、今のところ現存する唯一の註釈書ではあるが、ジャイニ氏も言うように (Intro. pp. vii~viii)、あまり価値のあるものとは言えない。というのは、前述の如く、問数で言って 175 問中、110 問だけがとりあげられ註釈されているのであるが、その部分についてみても、言々句々註釈が施されているわけでなく、簡単に触れられているにすぎない場合が多いからである。従って、Miln. 本文中の難解な章句の理解には必ずしも役立たないわけである。また、MS. 自体に間違いが多いためか 晦渋なところが少なからずあり、テキスト中に疑問符を付したところが散見せられ、校訂者の仕事は困難を極めたものと思われる。

以上のようなテキストであるにもかかわらず、以下に、訳出註解を試み

るのは、一つには、J. E. de Jong も既に多くを指摘しているように、(BSOAS, 1962, pp. 375~376), 明らかに校訂ミス(または誤植)と思われる箇所が数多く見出されるからであり(訂正箇所の一々については本註において示される), また前述のように本書は Miln. 註釈書としては一級のものとは言い難いが, 現存のものとしては唯一のものであることから, 訳出もあながち無意味ではないと考えるからである。筆者は MS. 自体は未見であり, 訳は全くの試訳に過ぎないものであるので, 大方の叱正教示を願えれば幸いである。

なお, 訳文中で下線を引いた部分は註釈の対象である Miln. からの引用語句であることを示す。また, 原文の頁数は round bracket () で, Miln. の頁数は square bracket [] で訳文中に示される。

略号

原文 = Milinda-Ṭikā (ed. by P. S. Jaini).

Miln = Milindapañho (PTS).

シャム本 = タイ王室版 Milindapañhā

Vism = Visuddhimagga (PTS).

Asl = Atthasālinī (PTS).

Vin A = Samantapāsādikā (PTS).

DA = Sumaṅgalavilāsini (PTS).

Abhidh-s-mhṭ = Abhidhammatthavibhāvanīṭikā
(ed. by Rewatadhamma).

PTS = Pali Text Society

JPTS = Journal of the Pali Text Society

BSOAS = Bulletin of the School of Oriental and African
Studies

SBB = Sacred Books of the Buddhist

SBE = Sacred Books of the East

ミリンダティーカー

(p. 1) かの世尊・応供・正等覚者に帰命し奉る。

絶えまなく世間の利益のためになされ、
絶えまなく世間の利益のために説示され、
絶えまなく世間の利益のために思念された
雄猛にして最勝なる調御丈夫に帰命し奉る。

問と法とに巧みなる、秘密の法を顕示せる守護者に帰命し、
正覚者・法・善衆にも〔帰命し奉る〕。

三蔵を熟知せるナーガセーナ大長老に礼拝し、問と法とを顕示せる彼
に頭によって（頭を相手の足につけて）〔礼拝する〕。

ミリンダパンハーの解明であるマドゥラッタパカーシニー¹を簡略に
して、〔次に〕作るであろう。入定せる者はそれを聞け。

その場合、『種々なる義の解明』(Pakiṇṇakatthavivarāṇa) と『ジャータカ拳場』(Jākakuddharaṇa) の二つのマーティカーがある。

そこで、

〔語の〕結合 (sambandha) と、語そのものと、語義 (padattha)
と、語の分解 (padaviggaha) と、〔語の〕難詰 (codanā) と、〔語
の〕注意 (parihāra) という六種の註釈がある。²

このように言われた中から、まず〔語の〕結合が知られるべきである。
それは更に、上述のと〔語の〕補足 (ajjhāhāra) とで二種となる。

第一章 種々なる義の解明

(p. 2)その中で、〔1〕ミリンダと名づけるかの王は……乃至……赴いたは、ここでは〔語の〕補足と結合が知られるべきである。³〔即ち〕世尊が般涅槃したのち、五百年を経過した時、王族の家に生まれたミリンダと名づけるかの王は、首都サーガラ，〔即ち〕サーガラと名づけられた最上の都城にて統治していて、ナーガセーナ長老のもとに赴いた。どのようにかと言えば、恰もガンガーが海に〔そそぐ〕如く (Gaṅgā va yathā sāgaram) と。ガンガー或はヤムナ等の中のいずれかある〔河〕が海に赴く如く、〔ナーガセーナのもとに〕赴いたという意味である。ところで、va の語はここでは〔母音の〕重複 (vā) の意味である (samuccayattha)。Gaṅgā vā と言うべきであったのに、ā の音を短縮して Gaṅgā va と言ったのである。⁴「或は青蓮華の水における如く (uppalaṃ va yath'odake)」⁵ というように、ここでは〔母音の〕重複の義である vā の語が〔言われた〕如くである。接近して……乃至……打ち破るは、ここでは前述の如き〔語の〕結合が知られるべきである。それはまたよく了知せられるべきである。

語 (pada) とは、接頭辞 (upasaggapada) と不変化詞 (nipātapada) と名詞 (nāmapada) と動詞 (ākhyātapada) とで四種である。

その中で、⁶ 名詞は一般的名 (sāmaññanāma)、徳の名 (guṇanāma)、人為的名 (kittimanāma)、自発的名 (opapāṭikanāma) の四種である。それらの中で、初劫において大衆によって同意され定め置かれたから、マハーサンマタという王の名が一般的名と言われる。説法者・糞掃衣行者・持律者・三蔵者・信者・信仰者の如き徳から出た名が徳の名と言われる。また、子供が生まれて名をつける日に、応供者に恭敬をなし、親類の者が

近くに集まり考えて、「これはこれこれの名である」というように名をつける。これが人為的名と言われる。また、前の施設が後の施設と符合し、前語が後語と符合する。例えば、前劫においても月は確かに月であり、現在においても月は確かに月である。過去において、太陽・海・地・山は確かに〔太陽・海・地・山〕であり、現在においても〔太陽・海・地・〕山は確かに〔太陽・海・地・〕山であるというこれが自発的名である。

これら四種の名は、アビダルマ・異門によって説かれた。而るに、声論によれば、名名詞 (nāmanāma), 代名詞 (sabbanāma), 複合名詞 (samāsanāma), 枝末接尾辞による名詞 (taddhitanāma), 根本接尾辞による名詞 (kitanāma) の五種が説かれた。それらはすべて、ここに適宜に知られるべきである。

さて、語義は〔次の通りである〕。近づいて (āsajja)⁷ とは、到達してである。処非処に関して (ṭhānāṭhānagate) とは、可能なこと (p.3) 不可能なことに関してである。多くのとは、多種類のものである。経の綱目をときほどいてというのは、経蔵と称せられる経の集まりをときほどき、欲求して、経を取り出し、経義 (suttattha) を浄化することで経の綱目を浄める、ということである。方法 (naya) とによってとは、或いは阿毘達磨・律などの方法・方策によってである。適用してとは、自らの智を働かせてである。意を喜ばせてとは、自分の心を幾度も幾度も繰り返し持続させることによって横臥させて (sayāpetvā)⁹ ということである。疑惑の依り所の破壊とは、疑惑すなわち疑いの原因である無明等の諸煩惱法を破壊することである。〔以上〕これが語義と言われる。

また、〔語の〕分解は次の様に知るべきである。ギリシャ人と称せられる野蛮人 (milāca 非アーリア人)¹⁰ たちの帝王 (inda) が ミリンダ (Milinda) である。四摂集によって人々 (jana) を喜ばせる (rañjeti) ので 王 (rāja) である。流水が落ちたものが沈むのを拾い上げる¹¹ というので

流動体を有するもの (sagara) であり、それが海 (sāgara) である。¹² 阿毘達磨と律とに随入するという意味の潜入したが、阿毘達磨と律とに潜入した、である。経の綱目をときほどいて (sutta^jālassa samatthitā) が 経の綱目をときほどいて (sutta^jālasamatthitā)¹³ であり、疑い (kaṅkhā) と疑いの根拠とで諸々の疑いの根拠 (kaṅkhāṭṭhānāni) であり、諸々の根拠を破壊することが諸々の根拠の破壊 (kaṅkhāṭṭhānavidālanā) である。以上が〔語の〕分解である。

次の五つの偈は誰によって作られたか、というのが難詰 (codanā) である。大徳¹⁴ ブッダゴーサ阿闍梨によって作られた、というのが注意 (parihāra) である。ただ五つの偈だけに限らず、〔ナーガセーナ〕長老や〔ミリンダ〕王の言葉についても、前後に相違する言葉も、これによって説かれたのである。

これらの中で、結合という方法については〔次のように言われている〕。

一〔文〕と称せられる語の集まりは、シンタクスを有する文章である¹⁵ とか、或るものの或るものとの〔語の〕結合が意味をなさない時、前者にとって後者は、意味よりすれば、等しからざるものに近いものにてあり、根拠を欠くものである¹⁶ とか、

二種々なる所作が適当にあるとき、種々性の故に、一所作によっておおいにかくされたものはなく、常に作者性はある¹⁷ とか、慣例を対象とする語は、多義・最勝義という点からすれば、覚 (buddhi) によって与えられた意味と、それ (慣例) の意味とを持つものである¹⁸ と説かれる。

三相とも¹⁹ 観察して、義と自性とが得られる如く、その如く語の適用 (saddapayoga) がなされるべきである。何となれば、語の適用によって、義と自性とが随起されるべきであって、義と自性によって、語の適用が〔随起されるべきでは〕ないからである。

更にまた、阿闍梨たちは諸国にあって、それぞれの国の言語 (vohāra) に従って、語の適用の義を語る。ここでは、ビンガラッタ (Bingaraṭṭha) [という国]²⁰ と結びついた言語に従って、語の適用の義の語られるべきである。例えば、[或る所と] 結びついた言葉があって、[それが] 善男子の (p. 4) 心に入る如く、その如く語られるべきである。どのようにしてか。もし能作者 (kattar) が主格 (paṭhamā) であるならば、差別を有する目的語 (kamma) は業格 (dutiya) である。主格の語尾をもった能作者²¹ を語ってから、次に動詞 (kriyāpada) が語られるべきである。もし差別を有する目的語が主格の語尾をもった語であるならば、それとそれの差別 (同格語) を語ってから、次に具格の語尾をもった能作者 (tatiyanta-kattar) が語られるべきである。それを語ってから、次に動詞が語られるべきである。

語義はまた、

意味を説明することによって、[言葉のもつ] 性からは超越すべきである。²² 語の意味は時と場所により解釈され、²³ 語のみが独存しているわけではない²⁴ とか、

合成語中の後分たること (parabhāva) のために必要としているものは、-am 等を有する格 (kārika) であり、語根 (dhātu) を伴った接尾辞で終わる語 (paccaya) にとって有益なるものは、サーダハナ (sādhana)²⁵ であるとか、²⁶

語根の語は動作を表現するものであり、接尾辞はサーダハナを表示するものであり、意味を表示するものが性であり、格語尾 (vibhatti) は意味を明らかにするものである、²⁷

というように、諸相を観察して、それぞれの語句の意味の分解 (atthaviggaha) が説かれるべきである。

語の分解はまた、

実に語根の意味は因であり、接尾辞〔で終わる語〕の意味は果であるべきであって、そのことを知るために、iti の語が適用される。²⁵

すべての文には、動作を表わす語 (kriyāsadda) と iti の語があって、動作の作生因 (kriyāyuppattinimitta)²⁹ が iti の語によって説明される、³⁰

等の諸相を観察して語られるべきである。この我々によって語られた語の適用と意味の適用という理解の仕方が ウパカーラ (upakāra)³¹ であり、〔それは〕諸善男子によって理解されるべきであり、また観察されるべきである。

これより以下は、意味と語形 (rūpa) の点で明らかでないもののみを註釈しよう。

よく区分整理された 道路・十字路・四辻・四衢路 (suvibhattavithi-caccara³²-catukka-siṅghātaka)³² とは、ここではよく区分整理された街路と称せられる道路・十字路と称せられる四辻・道の集結と称せられる四衢路のことである。Abhidhānappadīpikā³⁴ では次の様に言われた。

車道 (racchā) は、通りとも、時にまた街路とも言われた。

巷路 (byūha) は、袋小路 (racchā anibbidhā) であるが、大通り (pathatthi)²⁵ は繁華街路 (nibbidhā) である。

四辻とは、十字路³⁶ における道の集結である四衢路のことである。

(p. 5) [2] カーシーやコートウンバラなど (Kāsika-Koṭumbarakā-di)³⁷ の色んな種類の織物が商店に豊富にありということで、カーシーとは高価な織物か、またはカーシー国で生産された〔織物〕がカーシーであり、コートウンバラ地方で生産された織物がコートウンバラである。など (ādi)³⁸ の語によって、亜麻布・木綿布・絹布・毛織物・麻布・大麻布が〔意味せられる〕。白布 (dhavalavattha)³⁹ も、亜麻に順ずるドゥクターラ布 (dukūla)⁴⁰ も、絹に順ずるパットウンナ布 (pattuṇṇa)⁴¹・綵絹・

ソーマーラ布という中国産の織物も含む。実に次のようなことが Khud-dakasikkhā⁴² なる書物の中で説かれた。

ドクラー布も、パットンナ布⁴³・綵絹⁴⁴・ソーマーラ布という中国産のものも、神変によって生じたものも、神から授けられたものも、それぞれに順ずるものである。

その復註⁴⁵にはまた、「樹皮から作られたものがドクラー布であり、麻に順ずる……⁴⁶によって作られた糸からなるものが、パットンナ布⁴⁷・綵絹・ソーマーラ布という中国の織物で、絹に順ずるものである。神変によって生じたり、神から授けられた織物は、秘密の織物に順ずるものであり、それらの中のいずれかからなるものである」と言われた。

Vinayavinicchayaṭīkā⁴⁸にはまた、「ドクラー布麻に順ずるもの、神変によって生じたり神から授けられたもの、木綿に順ずるもの」と説かれた。

これらのうち、「ミリンダの問い (Milindapañha)」は、「相の問い (Iakkhaṇapañha)」と「疑切断の問い (vimaṅgalaṇapañha)」との二種であるというここで、諸法の相の質問によってある問いが、「相の問い」である。どこかに「諸法の相の問い」と書かれてあった。

〔3〕即座の弁才 (ṭhānuppattikapaṭibhāṇa)とは、それぞれにおいて甚深なる義を考察する時に、なすべき義務といわれた対象 (ṭhāna) において生起 (uppatti) [即ち] 生ずること (upparijana) が ṭhānuppatti であり、それが (生起) がそこに (対象) に属するのが即座の (ṭhānuppattika) である。所縁において現われる (paṭibhāti) のが弁才 (paṭibhāṇa) の智慧である。或る者に即座の弁才がある時、その者は即座の弁才ある者である。

〔ナーガセーナは〕可能であった。過去と未来と現在に関してとは、ここでは諸々の事柄を知ることが〔可能であった〕というように残りの節が

作られるべきである。或は、これだけが節である。この場合、私は過去世において布施を施し、戒を護り、修習をなし、善き行ないをなした者であった〔ので〕、今は智を具足し、財産があり、名声があるというように、過去の事柄を知ることが可能であった。〔また〕未来における幸福なる生活のために、今、私は布施等の福德をなすべきである。〔そうすれば、私は〕幸福なる生活を生ぜしめて、安楽となり、般涅槃するであろうと。このように、現在と未来の事柄を知ることが可能であったということである。すべての⁵⁰ 瑜伽や儀式という所作を行なう時という中で、結合せらるべきもの (yuñjitabbo) が瑜伽 (yoga)⁵¹ である。どこでも、(p. 6) いつでも、遍ねく〔できるものが〕瑜伽であり、常にすべての行なわれるべき儀礼を用意すること (vidahana) で儀式 (vidhāna) といわれる。「これとこれを行なおう。」「これが行なわれた時、これがあるであろう」という〔儀式の〕前分においては、方便をもって、行なわれるべき儀式は〔それを〕行なう時にのみ、所作と言われうる。前分においてと、〔実際に〕行なう時に念入りに行なうというのが意趣である。

すなわちとは、彼 (ミリンダ王) によって会得せられた多くの学問を、すなわち〔次の如く〕それらを分類しようという意味である。多義の故にまた大縁経の註釈 (Mahānidānasuttavaṇṇanā) においても、次の様な同様のことが説かれた。⁵² すなわち、「何れか」と何者かが語る。それは「何れが五取蘊であるか。すなわち、色取蘊である」等の仕方と一致する。

その十九の学問のうちで、天啓書 (suti) とは、ここで法がそれによって破られる (seyyate)⁵³ から天啓書、〔すなわち〕ヴェーダである。聖伝書 (sammuti)⁵⁴ とは、語の典籍 (saddagantha) である。残りのサーンキャ等もまた、行為者がギリシヤ人であることから、外学と見られるけれども、それらはよく学習されるべきである。

〔9〕食事の分与⁵⁵をなすようとは、食事をとるようにてである。

〔10〕 一度で眼が生じたとは、過去世において、三ヴェーダに精通した記憶と慧の力によって、一度で〔すなわち〕一回の学得のみで、眼が〔すなわち〕ヴェーダを学得する智眼が生じた。何回も語らせないで、⁵⁶ 一回のみ語らせて、憶持することができる者に、⁵⁷ 智眼が生じたという意味である。

阿闍梨に質問 (anuyoga) を与えて⁵⁹ とは、「阿闍梨に、あなた方が求めんとするところのものは何でも私に質問して下さい。私は答えるでしょう。〔私が〕解答することができないものについては、私に教えて下さい」というように、阿闍梨に自分への質問、問 (anuyujana)、詰問 (codana)⁵⁹ 〔の機会〕を与えて、である。ある者は質問〔の機会〕を与えることができても、解答することができない。⁶⁰ 然るに、ナーガセーナ少年はその両方ともできるのである。

〔16〕 法眼が生じたとは、「すべて集起した法は、いかなるものであれ、それは消滅する法である」という法眼が、預流道智が、涅槃を所縁として「すべて集起した法は、いかなるものであれ、それは消滅する法である」というかくの如き生起の行相をもって、生じた。すべて為作せられ、法として生じ、集起の法であり、生起を自性とするものは、いなるものであれ、すべてそれは消滅する法であり、法として生じたものであり、滅を自性とするものであり、無常であり、尽滅衰滅 (khayavaya) の法であるという〔法眼が〕生じたのである。何故に、涅槃を所縁として、道智が生じたのか。それを覆い隠す痴の黒暗を摧破して⁶¹ 生起したものだからである。

(p. 7) dosita⁶² と言うべきところを、-ta という字の代りと na という字を置いて〔19〕 dosinā (月明り) と言ったのである。

車 (ratha)⁶³ に乗ってとは、ここでは主人を喜ばせる (rammayati)⁶⁴ というので車である、という〔語の〕分解がなされるべきである。王の車はあらゆる宝物で飾られたものであることが求められるべきである。それ

によって運ぶ (vahati) から輜 (vayha) である。或は、上方は、仮屋 (maṇḍapa) と同じ⁶⁵ 板で葺かれ、あらゆる華鬘で覆って、というように註釈書⁶⁶ で説かれた仕方によって作られた車 (sakata) が輜といわれる。戦車 (sandamānikā) とは、両脇に金銀等でできた垂木を備え、迦楼羅 (金翅鳥) の翼の故に戦車であると註釈書⁶⁷ に説かれたところに従って作られた特殊な乗物である。輜等の二つ〔の乗物〕は、純然たる必要上、ここに引かれたのである。

〔外道の〕教祖 (titthakara)⁶⁸ というのは、

学得、聴聞、質問、答言、憶持という五法によって、渡場 (教派) に住する人 (tittavāso) と言われる。⁶⁹

このように説かれた渡場に住する人に、他の人々 (外道の人たち) は依り所を見出す。このように定立する一方、三蔵を渡場とすることを純粹に乞い求める人が、法を渡場となす人 (dhammatitthakara) である。

〔22〕聡明なとは、〔五〕蘊等について識る能力のある、である。自信あるとは、会衆に対して怖畏がない、である。熟知している (sāmāyika) とは、地方の言説 (論議) と称せられる宗義 (samaya) に善巧にして、〔それとは〕異なる自宗義に巧みなる智慧のある、ということである。弁才のある (paṭibhāno)⁷⁰ とは、巧みなる言説と称せられる弁才を有する、である。賢明なるとは、法の精髓に対する慧によって賢明なることである。法の精髓に対する慧というのは、智に到達した賢者である。「私は何を聴こうとするのか」、「私は善なるものを求めたか」というように、それによって伺察するところのものが、法の精髓に対する慧と言われる。

註

1. Madhuratthapakāsīnī. Milinda-Tīkā の別名 (cf. Intro. p. vii).
2. Mukhamattadīpanī, p. 6 (ed. W. D. Terunnānse, Colombo, 1898) に引用されている。原註 1 (p. 1) 参照。

3. 原文には *veditabbo* とあるが、*veditabbo* に訂正すべきである。
4. *Miln* 本文中に、*Gaṅgā va* とあるのを *Gaṅgā vā* (ガンガー或は) と解釈しているが、この場合の *va* は *iva* の短縮形とみた方がよいであろう。
5. 原文ではこの部分がイタリックで示されているが、*Miln.* 本文 (PTS 本、シャム本) 中に、この部分があるわけではない。(*Miln.* 本文中よりの引用語句は原文では全てイタリックで示される。)
6. 以下、自発的名の説明の終りまで *Asl.* pp. 390~391 における文と一致する。四種の名については、*Vism.* pp. 209~210 にも出ている。そこでは、① 位によるもの (*āvattika*)、② 相によるもの (*liṅgaka*)、③ 原因によるもの (*nemittika*)、④ 無因性のもの (*adhiccasamuppanna*) の四で、*Asl.* 等のものとは異なる。*Asl.* 等のものに類するものとしては、*Abhidh-s-mhṭ.* p. 233 に説かれているものを挙げることでできる。それによると、名は、① 随義 (*anvattha*) のものと、② 慣例 (*rūḷhi*) のものの二種であり、更に (一) 一般、(二) 徳、(三) 所作 (*kriyā*)、(四) 偶然 (*yadicchā*) の四種に分類されるという。このうち、(一) (二) (三) が①随義に、(四) が② 慣例に配当せられるであろう。
7. *Miln.* 本文では *asajja* となっている。
8. シャム本 *Miln.* (p. 3) では経の綱目 (*suttajāla*) の代りに義の綱目 (*atthajāla*) となっている。
9. 文意不明である。校訂者ジャイニ氏もこの語の後に疑問符を付している。*hasati* の causative として、*sayāpeti* に前綴 *hā-* を付した *hāsāyāpeti* という形も考えられ、ここでは *hā-* が脱落したと見るべきか。但し、PTS Dic. 等には、*hāseti*, *hāsāyati*, *hāsāpeti*, という語形が見られるのみである。
10. 原文には *milānaṃ* となっているが、*milācānaṃ* と訂正すべきであろう。ここでは、*Milinda* という王名が、*milāca* と *inda* とからなっているという通俗的語源解釈を示しているわけである。*milāca* (or *milakkha*) の梵語形は *mleccha* で、蔑戾車、弥戾車、蔑利車などと漢訳される。
11. 原文は、*Sa taṃ ññā <njā?> naṃ patitānaṃ sasīdanaṃ rāti ādadāti* 云々となっているが、文意不明でジャイニ氏はこの部分を corrupt だとして、*sotaṃ patitānaṃ saṃsīdanaṃ* と読むべきかとしている (p. 3, 原註 1 参照)。訳文はこれに従う。
12. *sāgara* (海) という名の由来については、次の様な伝説がある。神話上の *Ayodhyā* 王に *Sagara* という名の王がいたが、その王に六万人の息子がいて、彼らが *Indra* によって盗まれた犠牲馬を取り戻すために、大地を廻って

いと、Kapila 仙が現われて彼らを焼いて灰にしてしまった。Sagara の子孫である Bhagīratha が彼らの遺骸を清めるために、天から聖なる河 Gaṅgā を地上へもたらし、その河の流れとともに彼らの灰を海へ導いた。その海は、Sagara の息子たちに囚んで sāgara と名づけられたという (Moniel Moniel-Williams 及び V. S. Apte の梵英辞典による)。

13. 原文の *suttajālasamatthitā-kaṅkhā* を、*suttajālasamutthitā* と *kaṅkhā* の二語にわけるべきである。
14. ジャイニ氏はテキストに *bhadanta* (大徳) の語形を採っているが、しかし MS. の *bhaddanta* という語形 (原註 2 参照) も一般に用いられるので、特に *bhadanta* に直す要もないであろう (cf. PTS Pāli-English Dic. s. v. *bhadanta*)。
15. *Abhidhānappadīpikā*, p. 17, by Moggallāna, 1938 edn. (原註 3)
16. *Sāratthadīpanīṭikā*, vol. 1, p. 36, Rangoon, 1957. (原註 4)
17. *Saddatthabhedacintā*, ver. 17, Rangoon, 1958. (原註 5)
18. *Mahārūpasiddhi*, p. 18, by Dīpankara Buddhappiya, 1915. (原註 6)
19. 原文には *Tiṇi pa(i)lakkaṇāni* とあるが、この square bracket [i] を訂正の場合に用いる round bracket (i) に変え (cf. Intro. p. xiv), かつ *pa(i)* と *lakkhaṇāni* との二語に分けるべきであろう。
20. 本訳稿の「はしがき」を参照。
21. 原文には *paṭhamantakattam* とあるが、語尾のところは *-kattar* の業格と考えられるので、*-kattaram* または *-kattāram* とすべきであろう。
22. 「超越すべきである」は、原文の *ojaṇṇa* を *ava-√jñā* (to disesteem, despise, excel) の optative の 3 人称単数とみて仮に訳したものであるが、パリには見られないものである。原文には、この語の後に疑問符が付されている。
23. 原文は、*virājiyanti* であるが、ジャイニ氏の指示に従い、*vibhājiyanti* とみて訳す。
24. Cf. *Saddasāratthajālīnī*, ver. 93, Rangoon, 1928. (原註 2)
25. 語根と人称語尾との間に挿入される接辞のことである。*vikaraṇa* とも言う。
26. *Saddatthabhedacintā*, ver. 99, Rangoon, 1928 (原註 3)
27. *Saddasāratthajālīnī*, ver. 487. (原註 4)
28. *Saddavutti*, ver. 112, Rangoon, 1928 (原註 5)
29. 原文には、*kriyābyuppattinimitta* とあるが、*kriyāyuppattinimitta* と読んで訳す。

30. Saddavutti, ver. 113. (原註 6)
31. ある語の意味を理解するための、その語と関連する別の語による援助のことである。
32. 原文には, paccara とあるが, Miln. 本文の caccara に従って訳す。
33. 原文では, siṃghāta とあるが, Miln. 本文にあるように siṃghātaka と読むべきであろう。
34. Ver. 202-3. (原註 8)
35. pathaddhi という読み方もある。(cf. Abhidhānappadīpikā, ver. 202-3)。PTS の Pali-English Dic. (s. v. pathaddhi) によれば, Fausböll の Jātaka IV. p. 276 に出てくる pathatthi は pathaddhi と読まれるべきであるという。意味は不明瞭であるとしながらも, Jātaka の同箇所ではそれが nibbidhā vīthi で説明されていることから, また anibbidhā racchā と対照的に用いられていることから, nibbidhā を frequent road or busy street と訳している。
36. 原文は, paccara となっているが, Abhidhānappadīpikā, ver. 3 にある caccara に従って訳す。
37. 原文は Kodumbarakādi であるが, Miln の Koṭumbarakādi に従う。
38. 原文の adi を ādi に訂正すべきである。
39. 原文は dhamala- とあるが, ジャイニ氏の指示に従って dhavala- と読んで訳す。(原註 3 参照)
40. 美麗なる高級織物の一種。
41. 原文には paguṇṇa とあるが意味不明で, 以下に出てくる Khuddakassikkhā の記述(註 43 参照)に従って, paṭṭuṇṇa または pattuṇṇa (cf. Paramatthajotikā, II, p. 263, l. 1) と読む。pattuṇṇa は布の一種である (cf. Buddhadatta's Pāli-English Dic. s. v. pattuṇṇa)。原文の paguṇṇa は, 或は paguṇa (skt. praguṇa, straight; being in a good state; excellent) と読むべきか。
42. J. P. T. S. 1833, p. 90 (原註 4)。ただし, そこでのタイトルは Khuddasikkhā である。
43. 原文は paguṇṇa であるが, Khuddasikkhā (p. 90) の paṭṭuṇṇa に従って訳す。
44. Khuddasikkhā (p. 90) では, paṭṭa (綵絹)ではなくて, paṭi (パティ布)となっている。
45. Kkuddasikkhā-purāṇa-ṭīkā, p. 22, Mandaley, 1925. (原註 7)

46. この箇所 MS. が損われている。(原註 8)
47. 原文は, *paṅuṇṇa* である。註41参照。
48. *The Pali Literature of Ceylon*, pp. 202, 214 参照 (原註 9)。これは 1928年 G. P. Malalasekera が London で出版したもの。
49. Miln. 本文では, 過去・未来・現在の語は, 次に言われる「すべての瑜伽・儀式」を修飾する関係にあるが, 註釈では前文の「可能であった」との関係から理解されている。
50. シャム本 (p. 7) では, *samanta* (すべての) の代りに *kammanta* となっている。
51. ここでは呪術, 祈祷の如きものであろう。従って, *yuñjitabbo* は「専念せらるべきもの」と訳すべきか。
52. 大縁経の註釈によると, 「すなわち」(*seyyathīdam*) は次の様に説明されている。「すなわちとは, これはここに布置せられたものの義を分類するという意味での不変詞である。その意味するところは, 『何物にも何処にも, と言われたことの意味を汝のために分類しよう』(ということである)。(DA. II. p. 497. 原註 2)
53. *suti* (skt. *śruti*) は $\sqrt{\text{śru}}$ (to hear) からできた語であろうから, 語源的に言えば *suyati* または *sūyati* (skt. *śrūyate*) となるべきところであろう。*seyyate* (skt. *śrīyate*) は $\sqrt{\text{śr}}$ (to crash) を語根とするものである。
54. この場合の *sammuti* (Skt. *smṛti*) は $\sqrt{\text{smṛ}}$ (to remember) を語根とするもので, 「見解・同意・許可」又は「世俗・仮名・選出」等を意味する *sammuti* (*sam-* $\sqrt{\text{vr}}$, to cover, to choose or *sam-* $\sqrt{\text{man}}$, to think) とは異なる。而るに, I. B. Horner 女史は後者の意味を考慮して, *sammuti* を *convention* と註記した上で, これを *secular lore* と訳している (SBB. *Milinda's Question*, I. p. 5 & n. 5)。Rhys Davids は *secular law* と訳している (SBE, *The Question of King Milinda*, I, p. 6)。
55. 原文には *bhattavisagga-* とあるが, *bhattavissagga-* と訂正すべきである。
56. 原文には *avacāpetvā* とあるが, これに続いて *vadāpetvā* (語らせて) とあるから, 今は *avadāpetvā* と訂正して読む。
57. 原文には *asak[k]ontassa* とあるが, ジャイニ氏も接頭詞の *a-* に疑問符を付しているように, ここでは *a-* は不要に思われ, *sakkontassa* と読んで

訳す。

58. 「質問を与える (dadāti)」というのは慣用的な言い方で、「試験を通る」ことを意味する。師に「質問の機会 (便宜) を与える」というのが直接の意味だと考えられる (cf. Critical Pali-English Dic. s.v. anuyoga)。註釈の説明も、この意味でなされているようである。
59. ジャイニ氏は codana を modana (rejoicing, enjoyment) に訂正しているが、codana のままでよいであろう。
60. 原文には byākāruṃ とあるが、byākātum に訂正すべきである。
61. 原文に vidamsetvā とあるのを、ジャイニ氏は vid(h)amsetvā と校訂しているが、vid(dh)amsetvā と訂正すべきであろう。
62. dosa (暗闇)-ita (\sqrt{i} (to go) の pp.) という合成語か。因みに、DA. I, p. 141 には dosinā ti dosāpagatā (暗闇の去れるもの) という説明がある。
63. Miln. 本文では、rathavara (立派な車) とある。
64. ramayati (caus. of ramati) と訂正すべきか。
65. -maṇḍa(p)sadisa- とあるのを、-maṇḍa(pa)sadisa- と校訂すべきである。現代スリランカで maṇḍapa (または maṇḍapaya) と言えば、ピリット儀礼を行なう建物のことで、寺院や家の中に設置されて、その中で護呪経典 (ピリット) が唱えられる。
66. Vin A. II, p. 334 (-sabbapaliguṇṭhinam, ibid). (原註 1)
67. Ibid. (原註 2)
68. Miln. pp. 19~22 中に、この語は見出せない。(原註 3)
69. DA. II. p. 492 に次のような titthavāsa についての説明が出てくる。
Titthavāso ti punappunam gurūnam santike uggahaṇa-savana-paripucchana-dhāraṇāni vuccanti. (渡場に住する人々は、再々、師の下で、学得・聴聞・質問・憶持が言われる。) (原註 4 参照)
70. Miln. 本文では paṭibhāne である。(原註 5)

(本学専任講師)